V. ま と め

1. 岩ヶ平刻印群№19刻印石の意義

今回の調査では、徳川大坂城関連の遺構・遺物は刻印石1（岩ヶ平№19）と刻印石2（岩ヶ平№62）のみで、大坂城再築にかかわる近世初頭の石材採掘遺構は検出されなかった。しかし、刻印石1（岩ヶ平№19）は上面に回・ロ、西側面に㊀と計3個の刻印が確認され、本文でも記したように前者は小浜藩京極家、後者は鳥取藩池田家の刻印と推定される。

一石に複数の刻印が刻まれた資料はこれまでにも多数確認されているが、このように一石の別面に異なる藩の刻印がみられる例は、従来の採石場調査の中ではまったく知見になかった。ところが、1988年に確認された呉川遺跡出土石材のうち2号石材と3号石材（いずれも調整石）で、初めて複数藩刻印をもつ例を確認した。すなわち2号石材では播磨赤穂藩池田家[illegible]と帰属藩不明の[illegible]、3号石材では松江藩堀尾家の[illegible]と長州萩藩毛利家の[illegible]がそれぞれ別面に刻まれており、二つの藩の間で石材の放棄・譲渡・売買など所有権移動のあったことが推定された。さらには、小浜藩京極家の[illegible]刻印をもつ石材（調整石）も含めてほぼ同所より出土したことから、少なくとも運搬工程において複数の藩による協業が行われていた可能性も考えられた〔森岡・古川 1992〕。

この呉川遺跡例は、船積み前の集石場と考えられる海浜部での出土であり、採石場そのもので一石に明瞭な複数藩刻印をもつ資料はやはり知見になかった。したがって、今回調査した岩ヶ平№19刻印石が最初の確認になるわけであるが、本調査の終了後、南に隣接する山林（六麓荘町74番地2・3および72番地）において筆者の自主調査としておこなった刻印石分布調査で№19刻印石と同じ回・㊀の刻印が同一面に刻まれている例を確認した（№64写真5）。

さらにこの山林内では、鳥取藩関係のものであることが明らかな伊木三十郎刻印3石（№65・67・70写真15）と㊀一石（№68）、小浜藩京極家のものと思われ№19 a刻印と同じ回を2石（№63・69）、所属不明の⊙刻印（№66）の計8個の刻印石を検出した。中でも、鳥取藩の№65と№68は小浜藩の№69を隣接して挟む位置にあり、加えて№19・№64の南側にあってあたかも尾根上に並ぶような位置関係をもっている。そして、この尾根より西側の小谷筋では明白な鳥取藩関係の刻印は確認することができず、これまで所属藩を明らかにできていなかった[illegible]が圧倒的に優勢な分布（9個－№6・12・13・24・25・48・53・54・58）を示し、逆にこの[illegible]が尾根より東ではまったく認められないことから、二つの藩の採石領域の境界線がこの尾根筋に存在していた可能性が考えられる。

もう少し範囲を広げて刻印分布状況を検討すると、伊木三十郎刻印のうち最も南に位置する六麓荘町101番地の№35・36・37（写真10・13・9）から北西方向の尾根に向けて、同じく伊木刻印の№67・70・65があり、その北西尾根筋に回と㊀を併存する№64・19が存在す

る。さらに北西方向をみると、六麓荘町39番地では㊀をもつ№52が東、⑪を刻む№53が西に隣接し、もう一区画北西側の六麓荘町28番地でも、伊木刻印の№46と㊀の№47が東、⑪の№12(写真12)が西に相接して確認されている。このように見ると、南の六麓荘町101番地から北の28番地まで、明らかに一本の線上に並んで領域境界を示しているとみられ、№19刻印石はまさにその境界上に存在していると言えそうである。

ちなみに回の刻印は、□と共にこれまで西宮市苦楽園五番町周辺でのみ検出されており、この付近が小浜藩の採石領域であろうとの推定していた。一方、今回調査地の西側、芦屋大学・芦屋学園短大の所在する谷筋は、前述のように所属藩不明の⑪（写真6）が優勢で、なおかつ別種刻印の積極的な分布がみられないことから、芦屋学園短大の学舎を中心とする南北600m程の範囲は、ある一藩の占有採石領域ではないかと推定していた。残念ながら⑪は大坂城で検出されていないことから、それがどこの藩かを明らかにすることができなかった。ただ、現芦屋大学構内より移設したと伝えられる№26の▦は明らかに小浜藩のものであるため、⑪も小浜藩の刻印ではないかとも考えたが、▦は原位置を保たない№26のみの検出であるため、確信を持つにいたらなかった。

今回、№19とともに№63・64・69で回を検出し、それらの所在する小尾根筋に北西－南東方向の採石領域境界を推定してみると、やはり⑪も回と同じ小浜藩の刻印と推定することができそうである。つまり、この採石領域境界は西の小浜藩と東の鳥取藩を分けるものであることが明らかになったといえよう。№19の回と㊀は、ここがその境界上にあたることを示していたわけである。

岩ヶ平刻印群全体での確認刻印石数が40に満たなかった10年程前までは、多種類の刻印が錯綜する分布状態から複数藩が採石していることは推定されたものの、採石主体や採石領域を明らかにすることは不可能ではないかと考えていた。しかしその後の調査で刻印石数が飛躍的に増加し、確認数70個に達した今日では、刻印種ごとの明瞭な分布偏在性を指摘することができ、それが各藩のおおまかな採石領域を示すのではないかと考え得るにまでいたっている。

その概要を記すと、芦屋学園中高部以北の六麓荘町北部から西宮市苦楽園四番町にかけては、㊇のみ4個が確認されており出雲松江藩堀尾家の採石領域と思われる。その南東側、西宮市苦楽園五番町を中心とする地域は、前述のごとく回□が集中し小浜藩京極家の領域であろう。芦屋学園中高部の西側、南北約500m・東西150m程の範囲は、伊木三十郎刻印11個と㊀㊀が合わせて12個確認されており、明らかに鳥取藩池田家の採石領域である。その西側、芦屋学園短大の所在する小谷筋の南北600m程は、やはり前述のように⑪と回▦を代表刻印とする小浜藩京極家の採石地であろう。さらに西隣は、芦屋大学の所在する長背尾根を境として広大な長州藩毛利家の採石場（奥山刻印群K地区）が広がっている〔森岡編 1998〕。北方の山麓部（字剣谷）は調査が進んでいないので、検出刻印数は少ないが、六麓荘浄水場の北側で明らかに熊本藩加藤家の刻印と見られる◎と、唐津藩寺沢家の刻印乙が確認されており、この二藩の採石領域が設定されているとみられる。

以上のように、岩ケ平刻印群では現段階で小浜藩京極家・鳥取藩池田家・松江藩堀尾家・熊本藩加藤家・唐津藩寺沢家の五藩の採石を確認することができる。一方、六麓荘町南端から岩園町にかけての岩ヶ平刻印群南部地域では、明瞭に所属藩を確定できる刻印がなく、今のところ採石主体・領域を明らかにし得ない。

2. 近世末から近代の採石遺構について

今回検出した石材採掘坑１・２は、近世初頭の大坂城再築に伴うものではなく、近世末から近代の採石遺構と考えられた。同時期の石材採掘坑は、発掘調査で確認された例は未だ少なく、芦屋市内では1998年度の八十塚古墳群岩ヶ平22号墳の調査に伴って検出されたものがあるくらいである。

しかしながら地表観察では市内の山中・山麓のいたるところで確認され、小型の矢穴を伴う割石や鋭利な破断面をもつ石屑が散乱するところは枚挙に暇がない。大坂城関連の採石が行われているところ、すなわち石材が地表に多数露出し搬出可能な場所では、手当たりしだいに採石しているとさえいえる。奥山刻印群の分布する標高400ｍの山中では、半製品が集積された場所も確認している。

近世中期以降大きくなった住吉村産出の「銘石御影石」の名声の中で、類似石材を産出する打出村（岩ヶ平は旧打出村枝郷）・芦屋村が、個々の採石規模は小さいながら、いかに大量の石材を産出したかを示しているわけで、時期は新しいといえども芦屋市の特性を表した貴重な産業遺構として位置づけることができるであろう。

3. 遺跡地の取り扱い

発掘調査の結果、調査区において保存協議が必要となった文化財および遺構は、下記のとおりである。それぞれについて、現地調査の完了後、工事施工業者を通じて地権者の合意を得、以下に示すように取り扱いを決定した。

① 刻印石１は矢穴列および刻印ａ・ｂ・ｃの３カ所を有する巨石で、今回の建築工事において支障をきたす場所にあることから、移動や断割を行わず現状保存の取り扱いとした。

② 刻印を１カ所検出した刻印石２については、工事計画区域に入り、損傷することが明らかなため、敷地内の安全な場所に移設し、庭石として保存を図る取り扱いとした。

③ 採掘坑１・２については、工事により損壊が避けられないため、記録保存することで合意をみた。

また、工事の開始に際しては、市教育委員会の方に連絡するよう申し入れ、一部は工事立会に関する協力を要請した。

（森岡秀人・古川久雄）

参考文献一覧

（岩ケ平刻印群関係 刊本）

① 藤川祐作 1976　「八十刻印群の復元－徳川大坂城の研究３」『わだち』12 号　わだち編集部　（孔版刷）

② 藤川祐作 1979　「採石場としての岩ヶ平」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第４集　兵庫県教育委員会（同書収録の「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」の付論として収載）

③ 森岡秀人編 1980　『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第１分冊）』＜芦屋市文化財調査報告第 12 集＞　芦屋市教育委員会

④ 藤川祐作 1982　「徳川大坂城　東六甲採石場（西宮市所在）」『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』＜文化財資料 23 号＞　西宮市教育委員会

⑤ 森岡秀人 1986　『埋蔵文化財メモリアル ′80～′85』＜芦屋市文化財調査報告第14集＞ 芦屋市教育委員会

⑥ 古川久雄 1988　「徳川大坂城の採石場」『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第 16 集＞　芦屋市教育委員会

⑦ 古川久雄編 1990　『八十塚岩ヶ平支群第 10 号墳の調査－古墳損壊にともなう確認調査－』＜芦屋市文化財調査報告第 20 集＞　芦屋市教育委員会

⑧ 森岡秀人・白谷朋世 1992　「八十塚古墳群岩ヶ平支群第 50 号墳の発掘調査」『平成３年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書　月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第 50 号墳』＜芦屋市文化財調査報告第 22 集＞　芦屋市教育委員会

⑨ 古川久雄 1992　「岩ヶ平刻印群における池田家筆頭家老人名刻印の発見」『蘆樋』65 号　芦の芽グループ

⑩ 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世編　1993　『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第 24 集＞　芦屋市教育委員会

⑪ 森岡秀人・白谷朋世編 1994　『平成５年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町 94 番地（八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場）』＜芦屋市文化財調査報告第 25 集＞　芦屋市教育委員会

⑫ 古川久雄編 1999『兵庫県芦屋市・西宮市所在 岩ヶ平刻印群 刻印石資料集』　摂陽文化財調査研究所

⑬ 森岡秀人・竹村忠洋編 2001　『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き』　＜芦屋市文化財調査報告第 40 集＞　芦屋市教育委員会

（岩ヶ平刻印群関係 芦屋市教育委員会発行実績報告書）

(1) 森岡秀人・古川久雄 1989　『徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査－芦屋市六麓荘町 113 番地１・２所在（平成元年度埋蔵文化財調査概要 19)』（高田邸）

(2) 和田秀寿 1993a　『六麓荘町 79 番地試掘調査略報』（巽邸）

(3) 和田秀寿 1993b　『六麓荘町２番地試掘調査略報』　（辰野邸）

(4) 森岡秀人・白谷朋世 1993　『六麓荘町 94 番地埋蔵文化財分布調査略報』

(5) 竹村忠洋 1998a　『平成９年度 岩ヶ平刻印群（真鍋邸）発掘調査実績報告書』

(6) 竹村忠洋 1998b　『平成９年度 岩ヶ平刻印群（比屋根邸）発掘調査実績報告書』

(7) 竹村忠洋・古川久雄 1999　『平成 11 年度 岩ヶ平刻印群（芦屋学園）発掘調査実績報告書』

(8) 竹村忠洋 2000　『平成 11 年度国庫補助事業 岩ヶ平刻印群（原田邸）発掘調査実績報告書－震災復興調査』

(9) 竹村忠洋・森岡秀人 2001　『岩ヶ平刻印群（国光邸）確認調査概要報告書』

(10) 古川久雄 2001　『岩ヶ平刻印群 第 11 次（国光邸）発掘調査実績報告書』

（徳川大坂城東六甲採石場関係 刊本）

村川行弘 1962　『大坂城と芦屋』＜芦屋市文化財調査報告第２集＞　芦屋市教育委員会

芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会編 1969　『昭和 43 年度芦屋市文化財パトロール調査報告　芦屋及び西宮の刻印石調査資料』(芦の芽資料編第２集)　芦の芽グループ（孔版）

村川行弘 1970　『大坂城の謎』　学生社

有坂隆道・村川行弘 1971　「大坂城と芦屋」『新修芦屋市史』本篇　芦屋市役所

藤川祐作 1972　『摂津大坂城（六）－芦屋山中の採石場－』＜城と陣屋 65 号＞　日本古城友の会

岩本昌三・藤川祐作 1979 「大坂城と採石地芦屋の刻印石」『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』芦屋市教育委員会
藤川祐作 1980 「奥山刻印群」『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第１分冊）』＜芦屋市文化財調査報告第 12 集＞ 芦屋市教育委員会
藤川祐作 1985a 『摂津大坂城（十）－徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群－』＜城と陣屋 168 号＞ 日本古城友の会
藤川裕作 1985b 「徳川大坂城・東六甲採石場採石場の西限の再考」『郷土史料室だより』'85 夏- ゆり号 芦屋市教育委員会
藤川祐作 1988 「『武庫郡誌』にみられる大坂城石材についての再検討」『歴史研究手帖』２ 神戸歴史研究会（神戸深江生活文化史料館内）
藤川祐作 1990 「西宮市西平町遺存の分銅刻印石について」『蘆樋』第 61 号 芦の芽グループ
藤川祐作 1991 「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地－芦屋市呉川町発見の新資料を中心に－」『歴史と神戸』第 168 号 神戸史学会
森岡秀人・古川久雄 1992 「芦屋市立美術博物館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例－兵庫県芦屋市呉川町出土の大坂城再築関係石材について－」『阡陵』（関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集） 関西大学
森岡秀人 1993a 「伝芦屋廃寺の塔心礎(1)」『なりひら』第 13 号 芦屋市立美術博物館
森岡秀人 1994a 「伝芦屋廃寺の塔心礎(2)」『なりひら』第 14 号 芦屋市立美術博物館
森岡秀人編 1998 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ－芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群Ｋ地区内の事前発掘調査－』＜芦屋市文化財調査報告第 31 集＞ 芦屋市教育委員会
古川久雄 1998 「奥山刻印群Ｋ地区における毛利氏所用刻印の分布と意義」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅰ』＜芦屋市文化財調査報告第 31 集＞ 芦屋市教育委員会

（徳川大坂城東六甲採石場関係 実績報告・発表資料等）

芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会・刻印調査研究会編 1968 ～ 1973 『刻印調査資料』１～ 32 号 芦の芽グループ （青刷）
森岡秀人 1990 『芦屋市松ノ内町 56 番、58 番、60 番 平見秀市氏所有地の刻印調査』（終了報告） 芦屋市教育委員会
藤川祐作・重川忠廣・望月浩 1992 『芦屋墓園整備拡張に係る埋蔵文化財調査実績報告』 芦の芽グループ
藤川祐作・重川忠廣・望月浩 1993『芦屋墓園整備拡張に係る第２次埋蔵文化財調査実績報告』芦の芽グループ
古川久雄 1993 「徳川大坂城東六甲採石場－調査研究 25 年の歩みと課題－」（考古学研究会関西例会第 65 回研究会発表資料） 考古学研究会
森岡秀人 1993b 『芦屋市呉川遺跡埋蔵文化財損壊確認調査報告』 芦屋市教育委員会
森岡秀人 1994b 『芦屋市中央道敷設事業に伴う呉川遺跡Ｂ地点工事立会調査終了報告』 芦屋市教育委員会

（徳川大坂城と築城石）

岡本良一 1970 『大坂城』（岩波新書 739）岩波書店
志村 清 1970 『大坂城今昔』（日本古城友の会編）日本城郭資料出版会
藤井重夫 1970 『摂津大阪城』＜城と陣屋＞ 浪速社
藤井重夫 1977 『大坂城石垣調査報告書 其一』 築城史研究会
藤井重夫 1981 「大坂城の石垣符号」『日本城郭大系』12 大坂・兵庫（城郭調査こぼれ話）新人物往来社
藤井重夫 1982 「大坂城石垣符号について」『大坂城の諸研究』（日本城郭史研究叢書８）名著出版
藤井重夫 1983 『摂津大坂城（七）－生駒山系の石切場について－』＜城と陣屋 158 号＞ 日本古城友の会
藤井重夫 1984 『摂津大坂城（八）－主として瀬戸内六口島・櫃石島の採石場跡調査報告』＜城と陣屋 161 号＞ 日本古城友の会
藤井重夫 1989 「石からみた大坂城と城下町」『よみがえる中世(2)－本願寺から天下統一へ－大坂』平凡社

（その他）

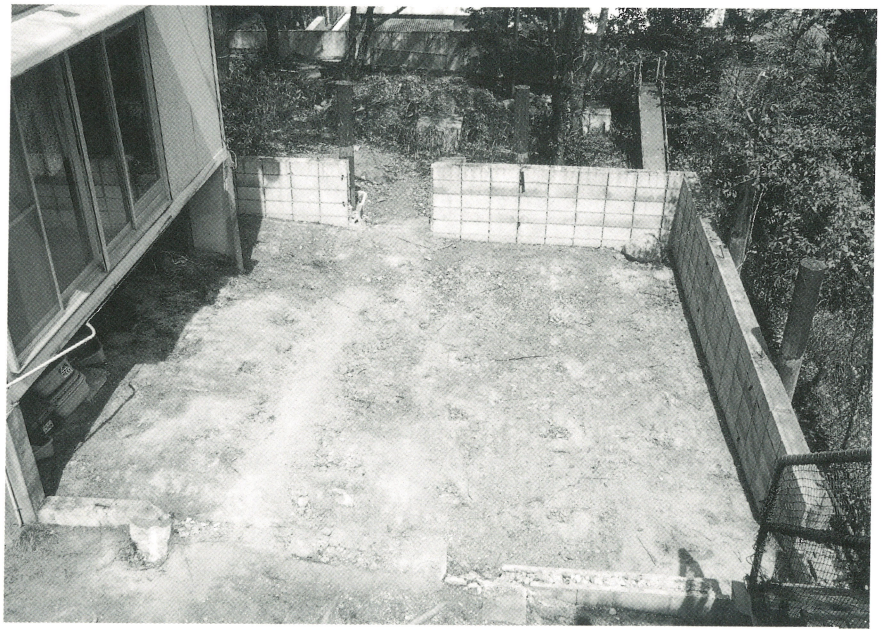
兵庫県教育委員会 2000 『兵庫県遺跡地図－第１分冊（発掘調査の手引・遺跡地名表）』

写　真　図　版

図版1

調査前全景
（南西から）

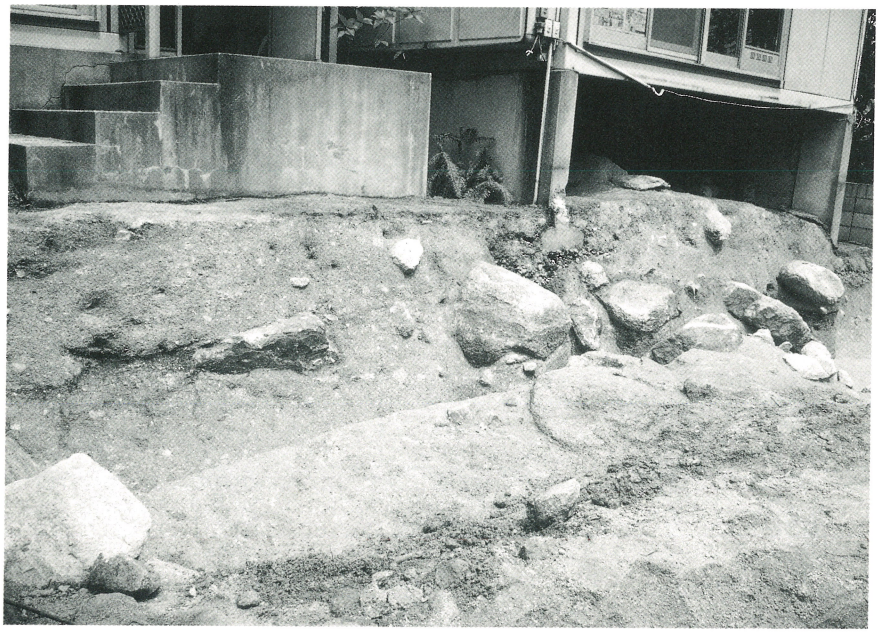
刻印石１とⅡ区発掘前
（南西から）



Ⅰ区発掘前
（西から）

図版2

Ⅰ区地山面検出状況
（西から）



Ⅰ区北壁土層断面
（南西から）

Ⅰ区北壁土層断面
（東から）

Ⅱ区完堀　石材採掘坑１・２検出状況（南西から）

Ⅱ区完堀　石材採掘坑１検出状況（南西から）

Ⅱ区完堀　石材採掘坑１・２検出状況（北東から）

Ⅱ区完堀　石材採掘坑２検出状況（北東から）

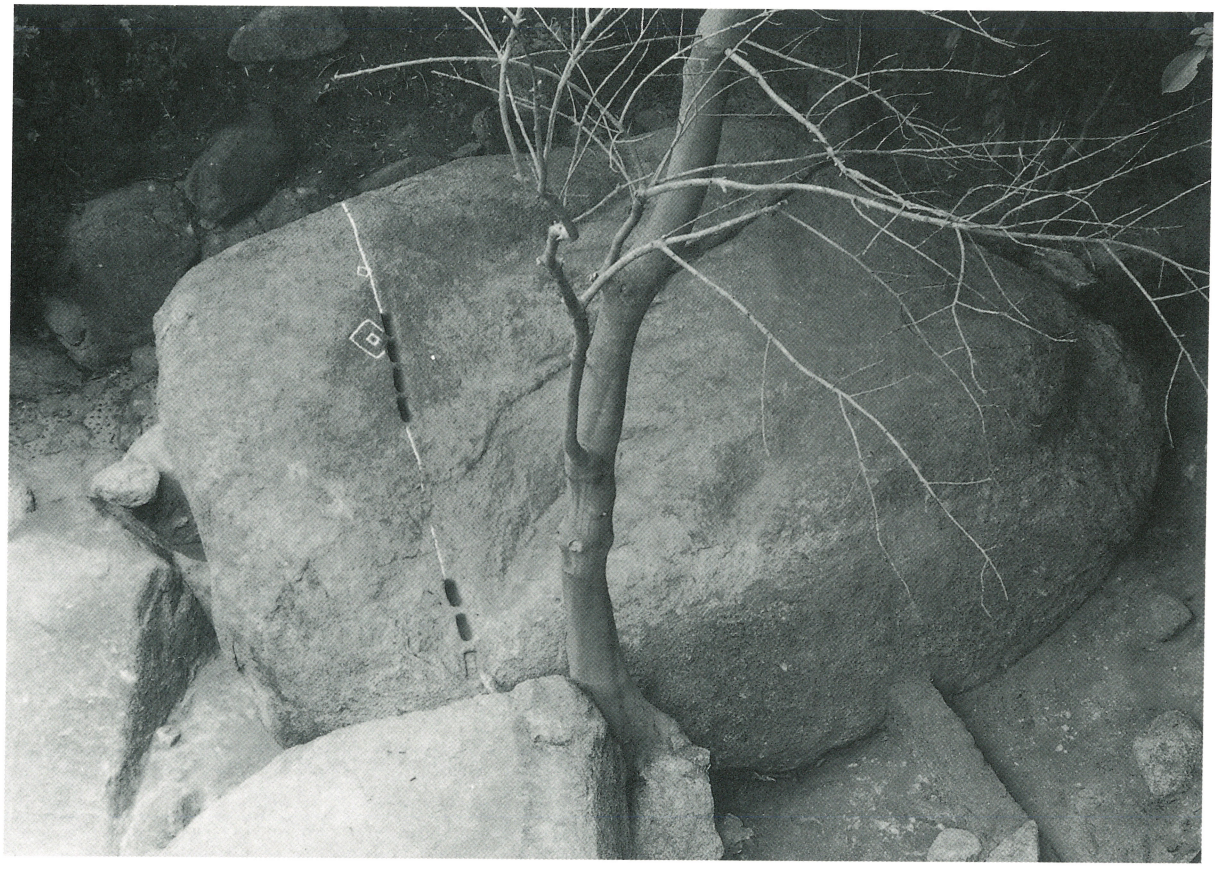
Ⅱ区南北畦　土層断面（南西から）

Ⅱ区全景と南壁土層断面（北西から）

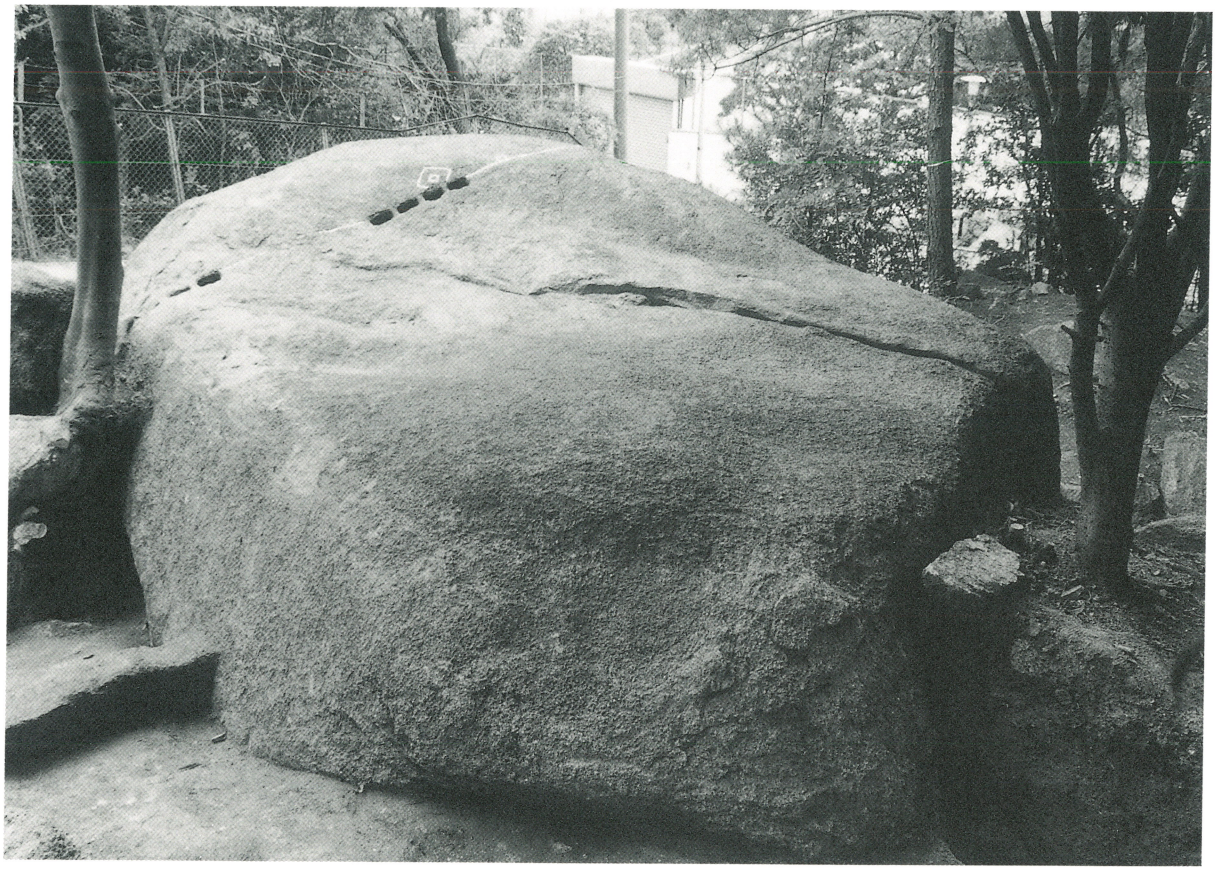
Ⅱ区石材採掘坑1
小割石出土状況
（西から）

Ⅱ区石材採掘坑1
小割石出土状況
（南西から）

Ⅱ区石材採掘坑2
小割石出土状況
（北から）



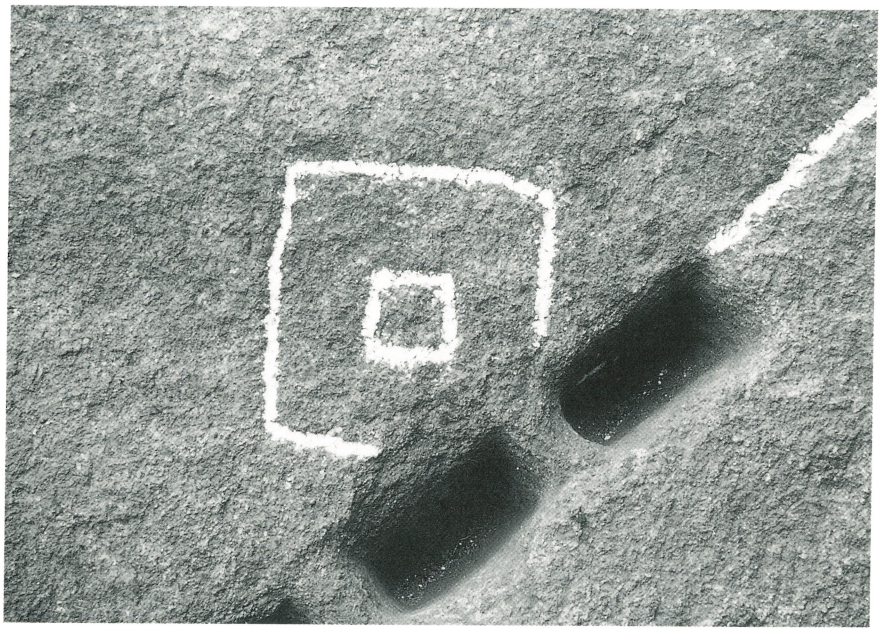
刻印石１　全景（東から）



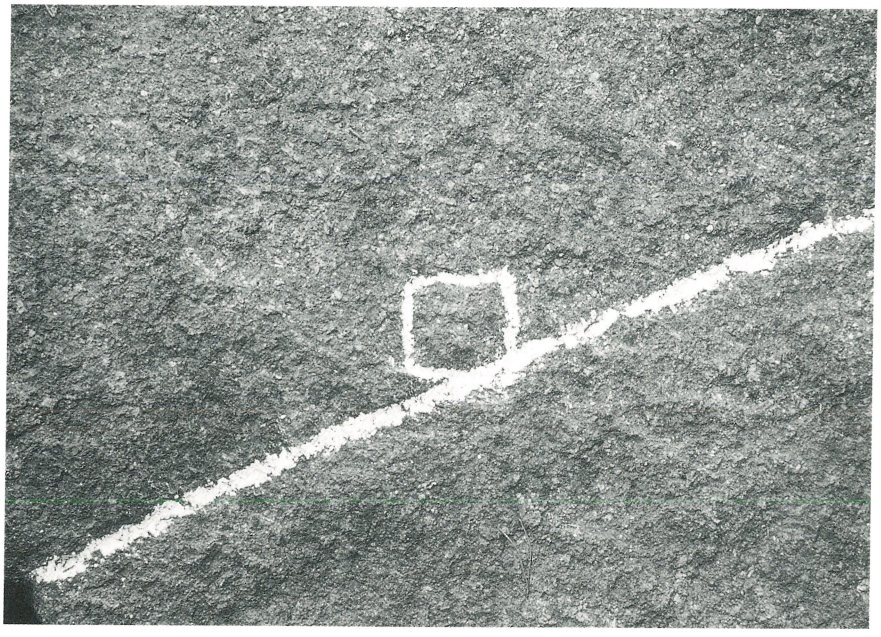
刻印石１　全景（北から）

Ⅲ区　地山面検出状況

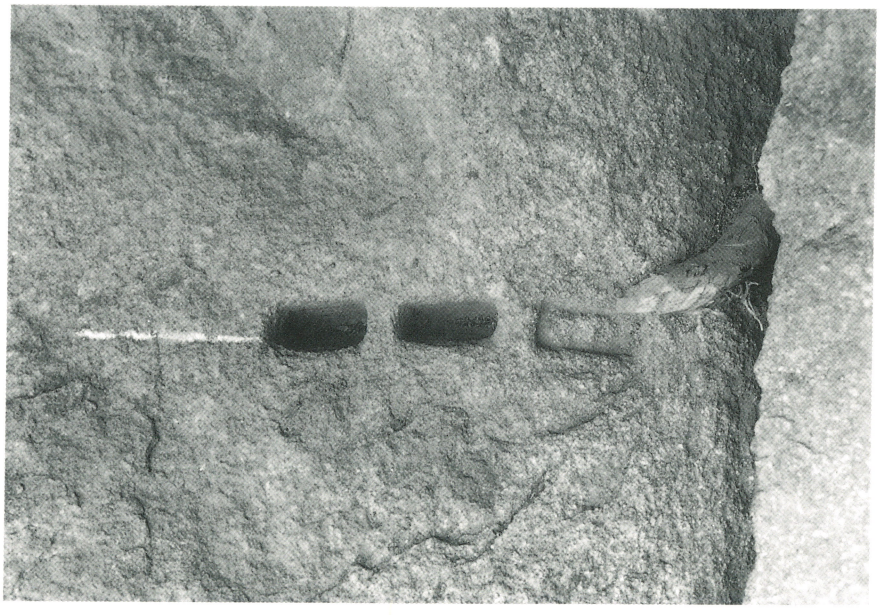
刻印石１　全景（南西から）と刻印ｂ



刻印石 1
刻印 a



刻印石 1
刻印 c



刻印石 1
矢穴痕

刻印石２　遠景（東から）

刻印石２　近景（南東から）

刻印石２近景
（北西から）

刻印石２近景
（北東から）

刻印石２
刻印部分

Ⅱ区石材採掘坑 1
出土　小割石

Ⅱ区石材採掘坑 2
出土　小割石

Ⅱ区石材採掘坑 2
出土　小割石

あとがき

採石場の発掘調査は、敷地全体を射程に入れ、未曾有に出てくる石塊・巨石群の中から自然に転落したもの、人びとが動かしたもの、石工が手を加えたものなど一石一石を入念に調べ、江戸時代初期にこの山林・台地に立ち入った労働者の涙ぐましい作業のようすを考えながら地道に、堀り進める日々の連続である。

ただ、今日、調査も積み重ねられ、採石地での専用的な石切丁場を実に巧みに分け合った諸大名の具体像も判明しつつあり、六麓荘町の高級住宅地にも大坂城に関わる歴史の息吹をなにがしか感じられるようになった。NHK の大河ドラマに登場するような大名たちのかかえた石工衆がどのようにしてこの土地で境界区分までして工役したのか。暗中模索の域を脱し、史実のいくつかを本書において指摘できた点を今は満足し、向後の研鑽を約したい。

（森岡秀人・古川久雄）

表表紙写真▶ 刻印石１（岩ヶ平刻印群 No.19）全景。上面の刻印回口は、若狭小浜藩京極家（92,000 石）のものと見られる。側面には、裏表紙拓影の鳥取藩の刻印があり、当初は小浜藩と鳥取藩の採石丁場を区分する傍示としての役割を持っていたと思われるが、後にこの石材も利用すべく、矢穴を入れて割ろうとしたのであろう。矢穴列と下取り線は、小口 80cm × 80cm、長さ 1.8m を標準とする調整石を割り取ろうとした意図がうかがえる。撮影　古川久雄。

裏表紙拓影▶ 刻印石１（岩ヶ平刻印群 No.19）西側面の刻印拓影（scale1/5）。㊀は、因幡・伯耆を領する鳥取藩池田家（320,000 石）の刻印と思われる。採拓　古川久雄。

芦屋市文化財調査報告第 42 集

平成 13 年度国庫補助事業

徳川大坂城東六甲採石場　Ⅱ

岩ヶ平刻印群（第 11 次）発掘調査報告書

印刷発行　平成 14 年 3 月 31 日
発 行 者　芦屋市教育委員会　社会教育部文化財課
〒 659 － 0085　兵庫県芦屋市精道町 7 番 6 号
TEL　0797-31-9066
編 集 者　芦屋市教育委員会　社会教育部文化財課
〒 659 － 0085　兵庫県芦屋市精道町 7 番 6 号
TEL　0797-31-9066
印　　刷　グランド印刷株式会社
〒 770 － 0941　徳島県徳島市万代町 6 丁目 20 － 15
TEL　088-622-8448

Ashiya Archaeological Record 42

2002.3

Ashiya City Board of Education, Japan